（報告要約）平安朝漢詩における表現と批評の連関

宋　晗

平安朝漢文学研究では、平安朝漢文学における六朝・唐文学の受容と変容の実態が、核心的な問題として究明されてきた。究明するための分析の手法については、例えば菅原道真のある律詩の一聯に白居易の措辞が襲用されていることを厳密に確定するというような、テクスト間の異同を精査する出典研究が基本となっている。そういった視座のもとに積み上げられた研究の成果をふまえ、本報告では批評に目を向け、それが平安朝漢文学の表現の発達に作用していたことについて論じた。

本報告で言う批評は、職業としての批評家が執筆した、それ自体で美的に鑑賞できる文芸批評を指すものではない。その根源として古代から普遍的にあるもの、すなわち、作られた一つ一の作品の出来栄えを味読し、何らかの基準のもとに作品間の優劣を判定する批評行為を指す。このような意味における批評は、平安朝の文献の端々に見て取れる。『江談抄』巻四所載の菅原道真と三善清行にまつわる逸話を例挙しよう（紙幅の都合上、便宜的に書き下し文のみを掲げる）。

鄙県の村閭は皆潤屋　陶家の児子は垂堂せず
菊は一叢の金を散ず

善相公初めは「鄙県の村閭は皆富貨」に作ると云々。心に褒誉有るべきの由存り。而して菅家只紀納言の「廉士が路の裏に」の句を美めて、此の詩に感ぜられず。宴罷んで退出する時、相公　鬱結を散かず、建春門に於いて菅家に尋ねらる。仰せて云わく、「「富貨の字」恨むらくは潤屋に作らざることを」。相公改作すと云々。

天皇が催す公的な行事の重陽宴に参席することとなった三善清行は、その場で披露する予定の自作「菊は一叢の金を散ず」（事前に与えられた題）の出来に自信があり、詩壇の第一人者である菅原道真に賞讃されることをひそかに期待していた。ところが道真は紀長谷雄（「紀納言」。道真の愛弟子）の作のみを褒め、清行の作に感心しなかった。宴の後、納得がいかない清行は道真をつかまえて理由を問いただしたところ、推敲の指摘を受け、その通りに改作したと言う。清行の七律は、この逸話の懸案となった一聯のみが推敲後の形で『和漢朗詠集』巻上・秋に抄録されて今に伝わる。佳句の誕生秘話とも見なせるこの逸話が事実であったかは詳らかにできないが、しかし平安末期の儒者・大江匡房の談論の筆録という形式で『江談抄』に採られていることから、この話の筋書きは同時代の詩壇の雰囲気を集約していたと見られる。この逸話から了解されることを二点に分けて提示したい。

一、儒者の文名に関わる漢詩は、元首である天皇が在席する公的な宴で披露されるものであったこと。

二、公宴の場で披露された詩の質は、権威の批評吟味によって決定づけられるものであったこと。

道真に評価されなかったことに清行が憤懣を抱いたのは、単に作品の質が認められなかったというだけでなく、天皇が在席する場で称揚されなかったために、面子を失しかねなかったからだと考えられる。これを要するに、天皇を中心とする批評の空間が、個々の漢詩の質、ひいては漢詩の作り手の評判を決定づけていた。平安朝の儒者は、公共の場での名声を勝ち取るために詩文の表現を磨いていたのである。

以上の二点をふまえて導かれるのは、公宴中心の批評が平安朝漢詩の表現の発達に方向を与えていたということである。ここで、菅原道真に賞讃された紀長谷雄の「菊は一叢の金を散ず」の佳句に目を向けてみよう（逸文は『本朝文粋』巻八に収録された紀長谷雄「延喜以後詩序」より掲出）。

廉士路中疑不拾　廉士は路中に疑いて拾わず
道家煙裏誤応焼　道家は煙の裏に誤りて応に焼くべし

菊の花を黄金だと思った廉士は紛失物だと思って拾わず、道士は練丹の材料だと勘違いして焼いてしまうだろう。この一聯は、事前に指定された題を美的に敷衍したものである。題に示された菊の花＝黄金という見立てに、さらに黄金＝練丹という見立てを重ねた機智的な発想が菅原道真に注目されたのだと思われる。そもそも、菅原道真の漢詩については、奇抜な見立てや、題意に関する仮構的理屈的なイメージが重要な表現のスタイルであったことが指摘されている。[一]そのような道真の嗜好が長谷雄の佳句の喧伝に貢献したということになろうか。重要なのは、九世紀末十世紀初頭に活躍した道真の嗜好が彼個人の美意識というだけでなく、平安朝漢詩全般に看取される傾向でもあった点である。その一々を紹介するゆとりはないが、つとに小西甚一氏が指摘したように、平安朝漢詩の理知的傾向は九世紀初頭から顕著に看取されるものであった。[二]本発表の趣旨によせて言うならば、数世紀にわたって年ごとの折節に催される公的集団的な宴において、競い合う儒者同士の相互批評、さらには一般貴族の広範な享受によって、平安朝漢詩の理知的傾向が次第に明確化されたと考えられる。

平安朝漢文学研究は、平安朝漢文学の性質上、どうしても中国文学との比較を前提としなくてはならない。ただ、一旦そういったA対Bという二項対立の図式から離れて、平安朝漢詩を作る主体である儒者がいかなる批評空間の中で詩想を練っていたのかに目を向けることで、新たな地平が開けてくるように思う。

（一）平安朝漢文学研究に共有されている問題意識や分析の手法を包括的に整理し、展望を示した論考として、渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）および三木雅博『平安詩歌の展開と中国文学』（和泉書院、一九九九年）の序論が参考になる。

（二）藤原克己「比喩と理知」（『菅原道真と平安朝漢文学』東京大学出版会、二〇〇一年／初出一九九三年）。

（三）小西甚一「古今集的表現の成立」（『日本学士院紀要』第七巻三号、一九四九年）。